

いのちのバトンタッチ

青木新門

目次

いのちのバトンタッチ

- 「納棺夫」 2
- 安らかな死者の顔 11
- 死者たちの微光 18
- 蛆虫も人間も救われる 22
- 生にのみ価値を置き、死を隠蔽する社会 27
- 五感で認識する「死」 31
- 「無見」と「有見」 38
- 光触かぶるものはみな 44

- 正しく導くよき人との出遇い 49
- いのちのバトンタッチ 56
- あとがき 66

いのちのバトンタッチ

■ 「納棺夫」

ただいま紹介にあずかりました青木新門でございます。

私が親鸞聖人のみ教えに出遇ったのは、宗教に関心があつて学んだからでもなく、誰かに教わったからでもなく、葬式の現場で出遇った不思議な体験でした。そんな葬式の現場での体験を通して親鸞聖人のみ教えに出遇うまでを本日はお話させていただければと思つていきます。

私の人生は、いま、振り返りますと、慙愧極まりない愚かなものでした。愚かさゆえの挫折の繰り返しでした。挫折をくり返した果てに、ひよんなことから葬儀社に勤め、遺体をお棺に納める湯灌・納棺の仕事に専従にしていた時期がありました。社内では納棺専従社員と言われ、世間では「納棺夫」と言われていました。

当時（一九六〇年代）の北陸では、湯灌・納棺は親族の男性がするのが習わしでした。湯灌といつても湯あみさせるわけではなく、死体を水にお湯を足した「逆さ湯」に浸したタオルかアルコールで拭いて、仏衣と称する白衣を着せ、髪や顔を整え、手を組んで数珠を持たせ、お棺に納めるまでの一連の作業です。そんな仕事を親族に代わつてするようになったのです。

納棺の仕事をはじめて間もなくのことでした。疎遠になつていた叔父が突然やつて来て、「昨日法事があつて親戚全員が集まつたとき、おまえの話が出た。店を倒産させて夜逃げでもしたのかと思つていたら、よりによつて死体を扱う隠坊のような仕事をしとるというではないか」と切り出し、「辞めろ、すぐ辞めろ。大阪や東京ならともかく、こんな

狭い富山でやられたのでは、親族の者は恥ずかしくて街も歩けない」と、異常な剣幕で罵ののしられました。私は親戚になぜそこまで言われなければならぬのかと反抗的な態度を示すと、「どうしても辞めないというのなら絶交だ。顔も見たくない」と言つて去りました。

私は叔父の剣幕に驚きました。「隠坊」などということばがあることも初めて知りました。私は死体に触れることをそれほど深刻に考えていませんでした。そのことは少年時代に旧満州きゅうまんしゅうで終戦を迎え、難民收容所や引き揚げの際に毎日死んでゆく人を見て過ごし、妹の死体を捨てた経験があつたからかもしれません。

また当時の私は、作家の吉村昭よしむらあきら氏の推薦で同人誌『文学者』（丹羽文雄にわぶんお主幹）に短編小説が載り、作家を志していたので、アルバイトのつも

りで納棺の仕事をしていたからかもしれません。

しかし、叔父から「親族の恥」と言われてから、意識するようになり、世間体を気にするようになりました。一度意識し始めると、世間から白い目で見られているような感覚になり、誰とも会わなくなつて卑下ひげしながら隠れるような生き方になつたのです。

妻にも内緒にしていたのですが、ある日、妻は親戚からでも聞いたのか、「そんな仕事は辞めてくれ」と泣きつかれました。娘が小学校へ入つて、「あなたのお父さんの仕事は何ですか」と聞かれたとき、「納棺夫」と言うわけにもいかなないと泣くのです。それもそうだなと思ひました。辞めようと思ひました。考えてみれば、他にいくらでも仕事はあると思ひました。経済は高度成長期に入ろうとしていた時代でした。

辞表を出そうと思った日のことでした。一つの事件に出遇います。この事件がなかったらきつと辞めていたと思います。その事を拙著『納棺夫日記』（桂書房）に書きましたので、引用します。

今日の家は、行き先の略図を手渡された時は気づかなかつたのだが、玄関の前まできてはつと思つた。東京から富山へ戻り最初につき合つていた恋人の家であつた。

十年経つていた。瞳の澄んだ娘だつた。コンサートや美術展など一緒によく行つた。父がうるさいからと午後十時には、この家まで度々送つてきたものだつた。車の中でキスしようとする、父に会つてくれたら、といつて拒絶した。それから、父に会つてくれと

何回か誘われたが、結局会う事なく終つてしまつた。しかし醜い別れ方ではなかつた。

横浜へ嫁いだと風の便りに聞いていた。来ていないかもしれないと思ひ、意を決して入つていつた。

本人は見当たらなかつた。ほつとして、湯灌を始めた。

もう相当の数をこなし、誰が見てもプロと思うほど手際良くなつていた。しかし汗だけは、最初の時と同様に、死体に向かつて作業をはじめた途端に出てくる。額の汗が落ちそうになつたので、白衣の袖で額を拭ぬぐおうとした時、いつの間に横に座つていたのか、額を拭いてくれる女がいた。澄んだ大きな目一杯に涙を溜めた彼女であつた。